

氏名(本籍)	む かし きょう こ 向 笠 京 子 (神奈川県)			
学位の種類	博 士 (ヒューマン・ケア科学)			
学位記番号	博 甲 第 5860 号			
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	2 型糖尿病患者の心理特性と SAT 法による支援			
主査	筑波大学准教授	博士(学術)	橋 本 佐由理	
副査	筑波大学教授	保健学博士	宗 像 恒 次	
副査	筑波大学准教授	医学博士	柳 久 子	
副査	筑波大学教授	医学博士	川 上 康	

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### (目的)

本研究は、将来、爆発的な増加が予想される 2 型糖尿病を取り上げ、食事や運動や薬物療法を駆使しつつ、患者の個々の不健康行動の改善を目標とする従来型支援法の問題点を指摘し、それを克服する支援法を見出すことを目指している。研究課題 1 で、2 型糖尿病患者の気質や心理特性、HbA1c 値の関連を、研究課題 2 では、悪化症例と改善症例との心理社会的要因の差異を把握するため、薬剤使用のない食事・運動療法中の患者の心理特性と HbA1c 値との関連を検討し、患者の特性を明らかにすることを目的とした。さらに、研究課題 3 では SAT 法の個別介入を、研究課題 4 では SAT 法の集団介入を実施し、効果的な支援法を見出すことが目的である。

### (対象と方法)

研究課題 1、2 では、2007 年に通院 2 型糖尿病患者 (n=273) と食事・運動療法中の患者 (n=106) を対象に、自記式質問紙調査をし、HbA1c 値と気質や心理尺度との関連を分析した。研究課題 3 では、2 型糖尿病患者 (n=18) に SAT 個別介入を 1～2 回実施し、非介入群を設定して HbA1c 値と心理特性の変化や質的検討をした。研究課題 4 では、患者 (n=19) に、SAT 気質コーチング法と表情脚本化イメージ法の集団介入を 1 回行い、介入前後の HbA1c 値と心理特性を比較・検討した。

### (結果)

研究課題 1、2 から患者は、執着気質が多く、特に執着気質高発現認知群で、HbA1c 値、自己抑制度、感情認知困難度、自己憐憫度がそうではない群と比較して有意に高かった。薬剤の使用のない食事・運動療法中の患者は、HbA1c 値悪化群では自己憐憫度が有意に高かった。また、HbA1c 値の高さと感情認知困難度の高さに有意な正の相関が認められた。研究課題 3 の個別介入の結果、患者は幼少児期に両親などの養育者の影響を強く受けていた。非介入群では変化は認められなかったが、介入群では介入後に HbA1c 値が有意に低下した。研究課題 4 では、集団介入後に抑うつ度、HbA1c 値が有意に低下したが、その他の心理特性については、変化が認められなかった。

## (考察)

2型糖尿病患者は、ストレス気質の執着気質を持ち合わせている者が多く、ストレスを溜めやすい他者報酬追求型の自己イメージスクリプト（感情を鈍麻させ、自己を哀れみながら、我慢して孤独に頑張る）が推察でき、医療者からの支持を遵守すればするほどストレスを高め、HbA1c値が高まり、血糖コントロールが悪くなっていることも推察できた。また、感情認知困難度の高さが血糖コントロールの悪さを予測し得ること、自己憐憫度が高い者は血糖の指標が悪化しやすいことが推察できた。したがって、自己報酬追求型への行動変容支援がセルフケアを支え、HbA1c値の改善につながる可能性がある。SAT法介入により、自己イメージは自己報酬型に変容し、ストレス耐性が強化され、血糖の指標が改善されたことから、自己イメージ変容を加えた治療はHbA1c値の改善に有効と考えられた。不健康行動の変容には、個人要因である乳幼児期のネガティブな自己イメージスクリプトの変容、環境因子である重要他者との関係性支援が必要であろう。臨床現場で適用するために、集団介入は、人間関係改善や抑うつ度の低下が確認でき、本来の自分への気づきと無理のない自己決定が、セルフケア行動を促し、HbA1c値の改善につながったと推察された。しかし、今回の集団介入では、他の心理特性は変化が認められなかったことから、今後さらなる検討が必要と考える。

## 審査の結果の要旨

本研究は、有用な研究テーマであり、丁寧に取り組んでいる点が評価できる。糖尿病患者の治療は、HbA1c値の改善がゴールではなく、合併症問題なども重要なので、今後、切り口を変えて別の指標も加えてさらに検討されることを期待したい。また、Aクリニックのみの対象であったが、大学病院など他の機関においても検討されることが望まれる。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。